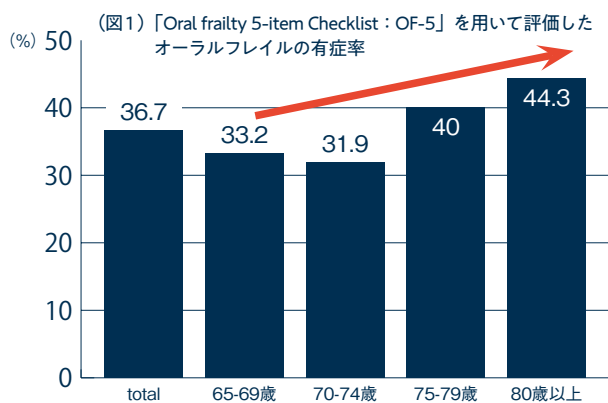


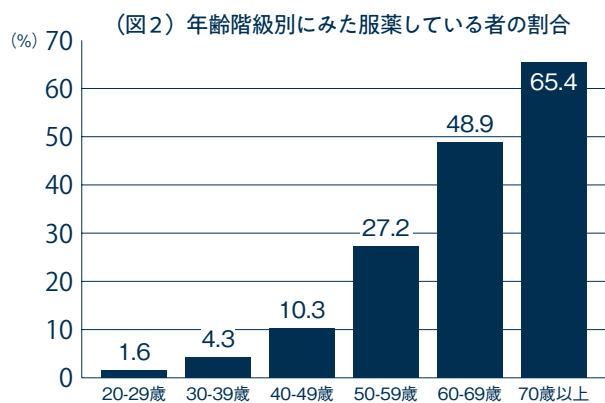
なぜ、65歳の患者さん全員に 口腔機能低下予防が必要なの？

① 65歳は身体面でも生活面でも大きく変わる節目

65歳～69歳の時点で、すでに約3人に1人がオーラルフレイルに該当しているとの報告(図1)や、60歳以上で約半数が何らかの薬を服用しているという報告があります(図2)。また65歳になると定年退職を迎える方が多く、時間に余裕ができる一方で、外出の機会や人とのつながりが減少することが多くなります。生活環境の変化が口腔にも影響し、口腔機能低下の症状に気づかず放置すれば重大な機能低下につながってしまうかもしれません。歯科衛生士はむせや口腔乾燥などささいな変化を見逃さず、患者さんが早期から口腔機能低下予防に取り組めるように指導しましょう。



出典：Iwasaki M, et al: Prevalence of oral frailty and its association with dietary variety, social engagement, and physical frailty: Results from the Oral Frailty 5-Item Checklist. Geriatrics & Gerontology International 2024; 24:371-377 をもとに (公財) ライオン歯科衛生研究所が作図



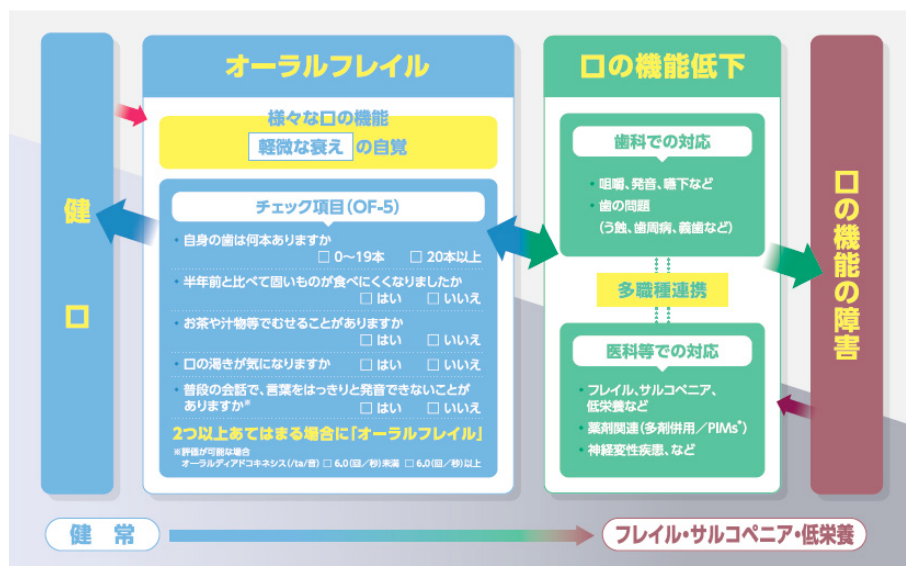
出典：2019年 国民健康・栄養調査内の「服薬状況」より作成

② オーラルフレイルを早期に発見できれば、健口な状態に戻せる！

オーラルフレイルとは、口の機能の健常な状態(いわゆる『健口』)と『口の機能低下』との間にある状態で、放っておくと低栄養などを引き起こします。主な症状としては、「口腔が乾燥する」「嚥みづらい」「むせる」などが挙げられます。

オーラルフレイルは、ほんのささいな症状から始まるため、患者さん自身では気づきにくいですが、歯科衛生士は口腔内の状態や患者さんとの会話の中から、オーラルフレイルに気づくことができます。さらに早期に発見できれば、健口な状態へ回復可能(戻る)です。(下図参照)

症状が進む前にしっかり予防することが大切なので、う蝕や歯周病だけでなく、口腔機能の変化にも目を向けてみましょう。



*Potentially Inappropriate Medications (潜在的に不適切な処方)

出典：オーラルフレイルに関する3学会合同ステートメント